

審査の結果の要旨

氏名 佐原 哲也

論文題目 近代バルカン都市社会史：多元主義空間における宗教とエスニシティ

本論文は、19世紀なかばに行われたオスマン帝国のタンズィマート改革が、当時この国家の支配下にあったバルカン半島の住民、とりわけ都市部に暮らす人々に及ぼした影響を、宗教、教育、言語などの面から多面的に分析した力作である。

現在、バルカン諸国の歴史学は、民族をアプリオリに実体化する傾向を強くもっている。それに対して筆者は、民族とは近代に作られた観念であるという構成主義の立場に立ち、この研究において、既存の研究史の体系的再読と新資料の発掘という二通りの手法で、バルカンの都市社会を構成する様々なエスニック・グループ間の関係の変化を、詳細に分析する。そのさい筆者は、英仏露和の研究はもちろん、トルコ、ブルガリア、ユーゴスラヴィア、ギリシア、マケドニア、ボスニア＝ヘルツェゴヴィナの各国の研究を網羅的に活用する一方で、オスマン・トルコ語、スラヴ系諸語、ギリシア語の原史料を利用している。則ち、バルカン各国の民族語のほぼすべての記述言語情報をもとに、19世紀にオスマン帝国の支配下にあったバルカンのすべての地域を分析しているのである。この点からも本論文は、欧米では勿論、バルカン各国でも極めて稀なものであり、国際的にも高く評価されうるものと評価できる。

本研究の学問上の貢献は、以下の三点を具体的に指摘できる。

第一は、タンズィマート期の地方行政システムが、通説とは異なり、実をあげたものであることを明らかにしたことである。そのさい筆者は、法制度面の検討・分析という従来の研究の限界を越えて、バルカン半島における地方行政文書等を積極的に利用することによって実態的に解明した点である。

第二に、タンズィマート改革の実施過程における宗教集団の反応の分析において、キリスト教徒（東方正教徒）に限らず、ムスリム、ユダヤ教徒、アルメニア教徒（アルメニア教会派キリスト教徒）などの宗教集団をも取り上げ、彼らの集団意識の変化を解明したことである。

第三に、タンズィマート改革の矛盾した側面もあわせて、総合的な解明と評価を行なっていることである。すなわち改革は、近代化によってバルカン都市社会に一定の緊張関係をもたらしたことを確認する。その一方で、筆者は、19世紀後半までバルカンでは多言語使用が一般的であったことを独自に確認した上で、従来トルコ化政策として批判されて

きたオスマン政府が進めていた多言語公用化政策が、深刻化していた教会と学校を巡る住民衝突を緩和し、マイノリティに対して適切な保護を与える可能性を持っていた面を浮かび上がらせた。そのことによって本論文は、独自の近代化をめざすオスマン帝国のタンズイマート改革が、バルカンの民族対立を緩和し、諸民族の共存を実現しうる可能性を持つものであったことをも、説得的に示したと言えるだろう。

以上のような成果によって、本論文は、従来 of 東欧・バルカン研究の一面的な傾向、各国の国民史を、批判的に検討したのみならず、バルカン地域史研究のための国際レベルでの共通の基礎を作り上げ、トルコ・イスラム研究に対しても建設的な貢献をなすものとも言える。なかに気負いの感じられる評語も散見されるが、独創性を追究する作品にはえてしてありがちで、論文全体の達成度に照らしてみれば瑕瑾に過ぎない。よって、審査委員会は、本論文を博士(文学)に相応しいものと結論した。